

創刊によせて

学長 兎玉三夫

このたび、本学日本文化学部の「言語文化学科研究紀要」が、たいへん斬新な内容を盛って創刊されるはこびとなりましたことは、この新しい学問分野の進路に鮮やかな光を投げかけるものとして非常に有意義に存じます。第一号の発刊を心から喜びますとともに、開学早々の多忙のなかで執筆されたご労作に意を強くするものがあります。

本学科の新鮮さは、文化の基本構造としての言語に普遍性を見出し、人間の文化活動に新しい地平をひらくこととするところにあります。もともと「言語」が根源的な意味で注目されはじめたのは、十九世紀末から二十世紀初頭のことです。デカルト以来の「意識」を中心とした哲学ではどうしても隘路に陥らざるをえなかったため、「意識」という私秘的で、自己完結した世界から脱出をはかるには、公共的な「言語」という場面に転換せねばならない、という考え方によるものです。つまり共通認識としての言語にたいする、いちじるしい関心の高まりを示したことが、二十世紀哲学の特徴といえます。

そういう基盤のうえに、人間存在の普遍性を証明するものとして言

語文化が重要視されるにいたったわけですが、いまや情報化、国際化の波濤のもとで、比較文化の試みは、さまざまな国の言語を比較対比することを中心に展開され、さらに言語文化を通じて人間の相互理解に強力な基盤を提供しつつあります。

このようにみてきますと、「言語」が比較文化を推進するための中心課題であり、日本語をめぐる諸文化の解明をめざす本学科の活動、すなわち日本文化の特質を言語表現によって世界文化の大海に浮かべる作業がいかに先端的で、未踏の地の開拓につながっているかが、おのずから明白になります。

その具体的な一果実として本誌が創刊されますことは、従来の言語概念を根本的に変革するものとして画期的な意味をもっています。ねがわくは、真に自由な発想による独創的で多彩な研究が続々と発表され、わが国言語文化創造の最前線を形成することができましよう、創刊にあたり心から熱望いたします。